

2020年8月23日 礼拝説教要旨

詩編講解説教28「嘆きの祈り」

詩編28：1～9、ルカ22：39～44

詩編第28編は分類上「嘆きの詩編」と呼ばれています。幾つかの注解書は、この詩編の背後には病いがあると述べています。それは「あなたが黙しておられるなら、わたしは墓に下る者とされてしまいます」（1節）この部分が死を意識したものになっているからです。ダビデが試練の中で肉体的にも精神的にも追いつめられ死を意識したのかもしれませんが、「墓」は原文ではただの「穴」という言葉です。しかしこの穴は旧約聖書では死者の世界、いわゆる陰府と解釈されています。そこは光の届かない漆黒の闇に包まれたところであり、詩人はその穴に落ち込まないように必死に神さまに救いを求めています。

これはわたしたちも経験する祈りであると言えるでしょう。病いを得て必死に神さまに祈ることがあります。いや、むしろ病いを得たからこそ真に祈ることができたという経験があります。河野進という牧師の「病まなければ」という有名な詩があります。

「病まなければ 捧げ得ない悔い改めの祈りがあり
病まなければ 聞き得ない救いの御言葉があり
病まなければ 負い得ない恵みの十字架があり
病まなければ 信じ得ない癒しの奇跡があり
病まなければ 受け得ないいたわりの愛があり、
病まなければ 近づき得ない清い聖所があり
病まなければ 仰ぎ得ない御顔がある
おお 病まなければ 人間でさえあり得なかった」

河野進牧師は、あの賀川豊彦の影響を受けて、岡山の長島愛生園、邑久光明園などハンセン病療養所で半世紀以上、伝道をした牧師ですが、病いを得た人々との出会いの中でこのような詩が生まれたのでしょうか。確かに病いの中でこそ人間の魂は研ぎ澄まされ、信仰も深化していくことは事実であります。この詩編第28編もまた人間の深い嘆きの中で紡ぎ出された祈りであり、信仰の言葉なのです。それは一つに病いというものを肯定するというチャレンジを可能にします。言い方を換えれば、病いも含めて人間という存在を丸ごと肯定し、受け止めていくことを可能にするのです。そこに信仰の生み出す新しい世界があります。この世は病いに対して否定的であり、不寛容です。現在のコロナ禍において罹患した人々に対する偏見、差別が起こっていますが、それはこの現実を改めて浮き彫りにしました。

最近、熊代亨という精神科医の書いた『健康的で清潔で道徳的な秩序ある社会の不自由さについて』という本を読んでいます。この本の中で熊代さんは次のように述べています。「健康が普遍的価値としてますますもてはやされ、一方で病と死が日常から切り離されていけば、私たちが病や死を日常の一部として、あるいは自分自身の人生の一部として位置付けることは簡単ではなくなる。病や死が非日常になれば、私たちはますます健康という普遍的価値だけを見つめて暮らせるようになる。その代わり、唐突に訪れる病や死は受け入れがたい経験となり、健康の追求はいよいよ強迫的にならざるを得ない。健康に著しく偏ったこのような死生観は私たちが健康である限り、幸福で快適なものではあろう。だが病や死に直面した時の備えや、それらを前提としたライフスタイルの選択には寄与しない」

確かに病や死は受け入れがたいものです。否定したくなる。でもそれも含めて人間なのであり、それがわたしたちの人生なのです。河野先生の「病まなければ人間でさえあり得なかった」まさにその通りです。病んで初めてわたしたちは人間であるし、このことを実感することができるのです。

注目すべきことにこの詩編の後半は前半の嘆きとは一転して感謝の言葉になります。同じ詩編の中に嘆きと感謝が同居しています。でもその理由はすぐ分かります。6節に「嘆き祈るわたしの声を聞いてくださいました」とあります。つまり神さまがわたしたちの嘆きを受け止めてくださる。否定されるのではなく、この嘆き祈るわたしたちの叫ぶような祈りを聞いてくださるのです。そこには変わらず病いの苦しみがあるかもしれない。でも神さまがわたしの嘆きを受け止めていてくださる。知っていてくださる。それでもう十分感謝なのだということです。

そして神さまがわたしたちの嘆きを受け止めてくださったそのことがはっきりと示されたのは、言うまでもなくイエス・キリストの出来事であります。今日はルカ福音書の伝えるゲッセマネの祈りのところを読みました。ここにも激しい祈りがあります。「イエスは苦しみもだえ、いよいよ切に祈られた。汗が血の滴るように地面に落ちた」とあります。主イエスは真の人となられ、わたしたちの罪のすべてを担われました。わたしたちの病いも死も嘆きもすべてをあの十字架で担われたのです。でもそのことによって神さまは罪も含めて、わたしたちの存在を丸ごと受け止めてくださいました。否定されるのではなく、受け止めてくださる。そこに救いがあります。

人生はいいことばかりではありません。病や死も含めて目を背けたくなるような現実があります。自分の不甲斐なさを嘆き悲しむ日々があります。でもそこから逃げて、蓋をして生きていても何の解決にもなりません。そういう負の部分も含めて神さまはわたしたちを見ておられるし、愛しんでくださるのです。イエス・キリストの出来事がそのことをはっきり示しております。そしてだからこそわたしたちは人生を肯定することができるのではないのでしょうか。

第28編に嘆きと感謝が同居している意味が少し見えてきたように思います。人生に起こる病いも死も、嘆きも悲しみもまた神さまが受け止めてくださるなら、それはやがて感謝へと変わるのです。「苦難は忍耐を、忍耐は練達を、練達は希望を生む」（ローマ5：4）苦難が希望に変わる。わたしたちはそういう信仰を生きています。この詩人もその信仰を先取りしてここに表しているのかもしれませんが。